

WIRELESS JAPAN 2012

ワイヤレス新ビジネス、ここに集結!!

5月30日～6月1日、東京ビッグサイトでモバイル／ワイヤレス分野の専門イベント「ワイヤレスジャパン2012」(主催:リックテレコム、企画・運営:日本イージェイケイ)が開催された。モバイル／ワイヤレス関連の製品やサービス、ソリューション、技術が一堂に会する専門展示会で、17回目となる今年は、国内外180の企業／団体が出展した。来場者は3日間で過去最高となる5万5840人に上った。



展示会&コンファレンスレポート

クラウドとM2Mの活用例が充実

今年は、スマートフォン関連ソリューションとクラウドサービスで踏み込んだ展示が多く見られた。M2Mなどの新分野でも斬新なシステム／ソリューションが話題を集めた。

文◎村上麻里子(本誌)

今回のワイヤレスジャパンは、スマートフォン・タブレットおよびクラウドサービスをテーマとする展示が目立った。

NTTドコモは例年、自社の研究開発の取り組みを紹介し、注目を集めている。今年は「パーソナルクラウド」「ビジネスクラウド」「ネットワーククラウド」からなる独自のクラウドサービス「ドコモクラウド」を前面に打ち出した展示内容で、多くの来場者が詰めかけた。

「3Dライブコミュニケーションシステム」は、離れた場所にいる人同士が、タブレット上に表示された3Dバーチャル空間内でコミュニケーション

を取ったり、体験を共有できるというもの。会場では、「美ら海水族館」「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」など6つのメニューから行きたい場所を選び言葉にすると、その場所のバルーンが表示され、タップするとタブレットを介して3Dバーチャル空間と一緒に体験できるデモを実施した。

ドコモクラウドを活用したサービスとして、「しゃべってコンシェル」「通話電話サービス」「メール翻訳コンシェル」なども紹介されていた。

モバイルサービスの進化に向けた取り組みとして、「透過型両面タッチディスプレイ端末」を展示。半透明の有機ELディスプレイを前面と背面

に搭載し、両面からタッチパネル操作を行うことができる。両面タッチを使った新感覚のゲーム機などの登場が期待できるという。

KDDIのブースは、新サービス「うたパス」「ビデオパス」を夏モデルのスマートフォン／タブレットで体験するコーナーを前面に打ち出した展示となっていた。

先端技術を紹介するコーナーで注目を集めていたのが、LTEや3G、WiMAXなど複数の通信方式を組み合わせることで通信の高速化を実現する「リンクアグリゲーション無線技術」だ。会場では、3GとWiMAXのリンクアグリゲーションと、3Gのみの端末でスループット比較のデモンストレーションを実施。リンクアグリゲーションにより、3G端末の2倍以上のスループットが出ていた。屋内では

「通話電話サービス」や「メール翻訳コンシェル」の説明を熱心に聞く来場者



KDDIのブースでは夏モデルのスマートフォンと新サービス「うたパス」「ビデオパス」を紹介

複数の通信方式を組み合わせることで高速化を実現する「リンクアグリゲーション無線技術」



離れた場所にいる人同士がタブレット上の3Dバーチャル空間内で体験を共有できるNTTドコモの「3Dライブコミュニケーションシステム」



「透過型両面タッチディスプレイ端末」は表と裏の両面から操作できる



「NFC×WiFi連携システム」は、NFCタグを読み込むとWi-Fiに自動接続して動画コンテンツを再生する



平均約2.4倍、屋外では平均約2.2倍の速度を出せるという。

NFCとWiFiを使って音楽や動画などの大容量データを再生する「NFC×WiFi連携システム」、煙センサーや温湿度センサーなど複数のセンサーを近距離無線通信規格「ZigBee」で接続し、一括して扱うソリューション「マルチセンサ対応M2Mクラウド」なども展示されていた。

M2Mソリューションの展示も充実

端末メーカーでは、京セラが国内外に展開しているスマートフォン／フィーチャーフォンを紹介。なかでも来場者の関心を引いていたのが、ウィルコムから6月下旬に発売される「DIGNO DUAL WX04K」だ。PHSとソフトバンクモバイルの3G回線に対応したAndroidスマートフォンで、基本的に通話はPHS、データ通信は3Gで行う。

また、KDDIから発売されている「URBANO PROGRESSO」に搭載されている「スマートソニックレシー

バー」は、ディスプレイ全体を広範囲に振動させることで、クリアに音声を伝える機能を紹介。従来のように受話口がなくても、ディスプレイを耳にあてることで音が聞き取れるというもので、工事現場のような大音量の中で通話するデモが行われ、多くの来場者が実際に試していた。

NECのブースには、MEDIASシリーズの夏モデルのほか、タイやメキシコで展開している海外モデルも並んだ。また、「CONNEXIVE」のブランド名でM2Mソリューションを展開しており、ブースでは最新のソリューションが多数展示され、来場者は興味深げに見入っていた。なかでも放射線測定ソリューションは、放射線量の測定結果を表示するモニタリングポストを設置して会場内の放射線量を表示し、関心を集めた。

インターネットイニシアティブ (IIJ) もM2Mソリューションを中心とした展示内容だった。同社は、モバイルデータ通信サービス「IIJモバイル」とクラウドサービス「IIJ GIO」を組み

合わせた「IIJモバイルM2Mソリューション」を紹介した。

これは、自動販売機の電子マネー決済、移動車両の現在地情報の把握、電力／ガスメーターの遠隔検針などでの利用を想定している。ブースでは、ダイドードリンコの「災害救援自販機」を参考展示した。自販機に併設されたデジタルサイネージは平常時は独自コンテンツを表示し、災害時には災害情報の伝達手段として活用できるという。

ワイヤレス上でのクラウド、SaaSが隆盛のなか、プラットフォーム (PaaS) 自体をSaaSとして提供する鉄道情報システムの課金プラットフォームという興味深いサービスもあった。

ネットワークベンダーでは、エリクソン・ジャパンが出展。IMSをベースとしたLTE上でのVoIPサービス「VoLTE」のデモを披露した。ブース裏にLTE基地局/コアネットワーク装置を配置し、スウェーデンのIMSをネット経由で利用するという仕組み。VoLTE対応スマートフォン試作



エリクソン・ジャパン代表取締役社長のJan Signell氏



ノキア シーメンス ネットワークスCEOのRajeev Suri氏



ファーウェイジャパン社長の間力大氏



NEC執行役員キャリアサービス事業本部長の山口昌信氏



ZTEジャパン副社長CTOの和敏彦氏

機間で実際にその通話品質を確認しようとする人でごった返した。

エリクソンが新しく開発した500Gbpsの処理能力を持つ次世代パケットコアノード「SSR (Smart Services Router)」や、ドコモと共同で実用化を進めているNFC対応POS端末も展示。SIMカードにNFCチップを内蔵したスマートフォンをポスターにかざすとクーポンが配信され、決済時に利用できるというデモも注目を集めた。

固定通信キャリアも出展

今回のワイヤレスジャパンには、固定通信キャリアが初めて出展した。

NTTコミュニケーションズは、スマートフォン用の050IP電話アプリ「050 plus」を中心に紹介。6月以降、Bluetoothと英語に対応することをアナウンスしたほか、法人向けに機能を追加した「050 plus for Biz」のデモを2台のiPhoneを使って実施した。

NTTコムは自社内でBYOD (Bring Own Your Device)を導入しており、年間1.3億円のコスト削減を見込んでいる。050 plus for Bizや、電話番号に0035を付けることで

通話料を会社請求にできる「0035ビジネスモード」による導入効果をパネルを使って解説し、熱心に質問する人が多かった。このほか、ニュースや天気など朝情報な必要を集約したアプリ「朝コレ」を紹介していた。

NTT東日本は、スマートフォンアプリ「スマホdeひかり電話」を展示。自宅のWiFiを利用することで、宅内でスマートフォンをIP電話サービス「ひかり電話」の子機として利用できるというもの。将来的には、フレッツ・スポットなどを利用し、外出先でもスマートフォンを子機として使えるようにするという構想を描いているという。

会場では、「M2MクラウドEXPO」「スマートフォン／ケータイショッブEXPO」「商用車テレマティクス&運用管理システムEXPO」も併催された。スマートフォン／ケータイショッブEXPOには、スマートフォンのアクセサリ製品人気を反映し、テレホンリース／ラスタバナナ、CASE MATE、ワークスタジオなどがユニークなカバー類を出展した。

アジア各国の通信キャリアが参加

基調講演をはじめとするコンファレンスは、3日間で30コース・113のセッ

ションおよびパネルディスカッションを開催。初日は、基調講演に続いて、2005年以来7年ぶりとなる「アジアワイヤレスサミット2012」も実施された。

アジアワイヤレスサミット2012実行委員長の寺崎明氏、総務省総合通信基盤局長の櫻井俊氏の挨拶の後、NTTドコモ代表取締役社長の山田隆持氏が「新たな成長に向けたドコモの取り組み～スマートライフの実現に向けて～」をテーマに2015年度までの中期ビジョンについて講演。続いて登壇したKDDI代表取締役社長の田中孝司氏は「3M戦略が目指す世界」と題し、同戦略の概要や導入の背景を解説した。

アジアワイヤレスサミット2012では、インド、ベトナム、韓国、日本の通信キャリアの代表が集まり、「アジアの移動通信サービス、現状と将来像」をテーマにパネルディスカッションが行われた。日本からはNTTドコモ代表取締役副社長の辻村清行氏が参加。スマートフォンの普及とそれに伴うデータトラフィックの増加など各国の国内市場の現状について議論が交わされた。

また、エリクソン、ノキア シーメンス ネットワークス、ファーウェイ、NEC、ZTE各社のトップも講演した。



京セラの「スマートソニックレシーバー」は、ディスプレイ全体を振動させることで音声を伝えるので、受話口が不要になる(右)



「災害救援自販機」は、災害時の情報伝達手段としても活用できる (IIJブース)



エリクソンは、NTTドコモと実用化を進めているNFC対応POS端末を展示



NTT東日本では、フレッツ・スポットなどを利用して外出先でもスマートフォンをひかり電話の子機として使えることを目指している



朝に必要な情報を集約したアプリ「朝コレ」(NTTコミュニケーションズ)

NECは放射線測定ソリューションを紹介、測定結果を表示するモニタリングポストを会場内に設置していた

山田隆持氏 | NTTドコモ 代表取締役社長

「土管化」防ぎ付加価値を提供

NTTドコモでは一昨年、「2020年ビジョン」を掲げました。モバイルを核としながら、ドコモが総合サービス企業へと進化をしていくビジョンです。

そして、それを実現するための具体的な実行スケジュールとして、2015年度に向けた取組みを「中期ビジョン2015-スマートライフの実現に向けて-」として策定しました。

お客様満足度向上を目指すことを前提として、そのうえに2つ、モバイルのサービス進化に向けて取り組んでいきます。それは、①スマートフォンを中心にモバイルのサービスを進化させていくこと、そして②産業・サービスの融合による、新たな価値創造の実現です。

これを達成するためのツールとは、パーソナルクラウド、ビジネスクラウド、そして「ネットワーククラウド」です。ドコモはこの3つのクラウドを総称し、「ドコモクラウド」と呼んでいます。

ネットワークに機能を埋め込む

ここで言うネットワーククラウドというのはドコモの造語です。我々はこの、ネットワークでの高度な情報処理・通信処理により、付加価値を提供する基盤と位置づけています。どうやってお客様に付加価値を提供できるのか、これが非常に重要なことです。

ネットワークにインテリジェンスを

付けることで、端末だけでは実現できないことをできるようにする。それによって「ネットワークの土管化」を避けられると考えています。

ネットワーククラウドを利用したサービスのいくつかは、すでに実現しています。

まずは、スマートフォンに向かって話しかけると、適切な回答を自動で画面に表示する「しゃべってコンシェル」です。3月1日のサービス開始以来、今まで7400万件程度のアクセスがありました。今後は質問形式に対してコンシェルが答える「知識Q&A」をはじめ、どんどんバージョンアップをしていきたいと思っています。

音声認識サービスでは、他に「通訳電話」というサービスがあります。これは話した言葉が任意の言語に変換され、通話相手に伝わる機能です。今年の秋の商用化を目指しています。

最後に紹介するのは、通訳電話と同じような機能を持つ「メール翻訳コンシェル」です。日本語でメールを打つと言葉が変換されます。現在カバーしている言語は英語と中国語と韓国語です。近日中に言語を拡大していきたいと考えています。これは6月1日からサービスを開始します。

これらの機能はネットワーククラウドの中に入っています。ですからドコモのネットワークにアクセスして

いただければ、どの端末でも使うことができるのです。



ドコモクラウド全体の今後の取り組みとして、dマーケットの機能を拡充し、今年8月にマルチデバイスへの対応をします。dマーケットのコンテンツをスマートフォンで見ただいて、帰宅後はタブレットで同じものを見ていただけるような利用方法を実現します。

加えてSPモードメールや電話帳のマルチデバイス化も、2012年度中に達成したいと考えています。また、こうしたサービスをより良い通信品質で利用していただくため、Xiエリアの拡大も着実に進めています。今年3月末には政令指定都市の人口カバー率100%を達成しました。今年度は約1700億円を投資し、エリア拡大を継続します。

スマートライフの実現に向けて、ネットワーククラウドをしっかり磨き上げ、さらにお客様に便利なパーソナルクラウドとビジネスクラウドも提供させていただくことで、目標を達成していきます。

(文責・編集部)

田中孝司氏 | KDDI 代表取締役社長

3M戦略着々、今秋ステップ3へ

「auモメンタムを回復させて、次の時代を見据えた戦略を進めないといけない」という思いから3M戦略を立ち上げました。TPOに応じてデバイスを使い分け、多様なネットワークでやりたいことを容易に実現できることを目指しています。

3Mとは、マルチユース、マルチネットワーク、マルチデバイスのことで、これらを実現するのが3M戦略です。

今年の1月16日に、3M戦略のステップ1として、「スマートパスポート構想」を発表しました。これは「オープンで制約のない世界へのパスポート」というコンセプトの下に製品を出していく構想です。

スマートパスポート構想の具体的なサービスは、「auスマートバリュー」「auスマートパス」「au ID」の3つです。

auスマートバリューのサービス内容は非常にシンプルで、KDDIもしくは提携事業者のFTTH/CATVと、auのスマートフォンを同時に契約すると、auの1回線あたり月額1480円が値引きされます。全国のFTTH/CATV事業者47社と提携し、真の意味でのFMCのサービスを提供しようというのがコンセプトです。

auスマートパスは、500以上のアプリが取り放題になるほか、クラウドストレージが付き、さらにセキュリティ関係のソフトがバンドルされる

サービスです。月額390円で提供していき、非常に伸びています。

私は社長に就任してから、何とかしてダウンパイプ(土管)ではなくて付加価値が付いた「スマートパイプ」を実現したいと主張してきましたが、その成果のひとつがauスマートパスです。

3月からスタートしたこの2つのサービスは、5月の頭に両方とも100万契約を超えました。KDDIのスローガンである「あたらしい自由。au」を、選べる自由、楽しむ自由という形で実現できたのだらうと考えています。

そして、3M戦略のステップ2として、5月15日に「ビデオパス」と「うたパス」を発表しました。au IDに紐付けて、スマートフォンだけでなく、タブレットやPC、さらにテレビまで拡張していこうと考えています。

ビデオパスは月額590円で、さまざまなジャンルの映像作品が見放題になります。新作も見れることが他社の類似サービスとは異なる点です。

このサービスはマルチデバイスに対応します。外出先ではスマートフォンで途中まで見て、その続きを帰宅後にテレビで見るといったような利用が可能になっています。

うたパスは月額315円で多彩なジャンルの楽曲が聴き放題になるサービスです。最新の曲の購入もできま



す。チャットしながら相手と同じ音楽を楽しめる「ソーシャルフォロー」機能がセールスポイントです。

LTE対応を前倒しで開始

そして今秋に3M戦略のステップ3を発表する予定です。

マルチデバイスの販売施策として、LTEの開始に合わせて製品のラインナップを強化します。タブレット、テレビ、PCの種類を拡充する予定です。

特にテレビとの連携を強くしていくために、「Smart TV BOX」という製品をリリースします。旧来のCATVのチャンネルだけでなく、インターネットやKDDIのサービスにつながる新たなテレビの使い方を提案していきます。

また、マルチネットワークについては、今後は4G対応の一環としてLTEサービスを立ち上げます。当初の計画では今年12月からの開始予定でしたが、前倒しでスタートし、年度末にはエリアカバー率96%まで達成する予定です。

(文責・編集部)

アジアワイヤレスサミット2012

スマホの未来、トラフィック対策を議論

パネルディスカッションには日本、韓国、インド、ベトナムの通信キャリアの代表が集まった。共通する課題はデータトラフィックの急増とひっ迫する周波数対策だ。各国の取り組みの現状が紹介された。

文◎藤田 健(本誌)

今年のワイヤレスジャパンで注目を集めたのは、初日に開催された「アジアワイヤレスサミット2012」だ。モバイル／ワイヤレスビジネスの拡がりにはグローバル規模で進んでおり、なかでもアジアは今後の成長市場として世界の注目を集めていることから、7年ぶりに開催された。

メインイベントは、「アジアの移動通信サービス、現状と将来像」というテーマで行われたパネルディスカッションだ。

参加したのは、NTTドコモ・代表取締役副社長の辻村清行氏、インドTata Teleservices・CSOの大野弘司氏、韓国KT Corporation・バイスプレジデントのキム・ソクジュン氏、VNPT(ベトナム郵政)グループ・バイスディレクターのトラン・ビン・フック氏の4名。モデレーターは、ITU無線通信規則委員会委員の伊藤泰彦氏が務めた。

開催に先立って、実行委員長で東京工業大学客員教授の寺崎明氏が挨拶。「スマートフォンの導入による急激なトラフィック増や世界でのLTE導入戦略等、現在のモバイル／ワイヤレス市場で注目されているテーマについての活発な議論を期待する」と述べた。

アジアでも普及が著しいスマホ

まず、モデレーターの伊藤氏が移動通信における最近の話題として、①アジア市場での驚異的な伸び、②スマートフォンの普及、③データトラフィックの爆発、④UIとアプリケーションの変化、⑤クラウドの積極利用開始の5つを挙げ、「こうした新たな動きに対して、我々はどのような方向に向かえばよいのかを議論していきたい」と述べた。

続いて出席者が自国のモバイル／ワイヤレス市場の現状を紹介した。

Tataの大野氏は、インドの携帯電話市場について、固定電話、有線ブロードバンドだけでなく、電気や水道といったライフラインですら50%も普及していない中で、携帯電話だけが70～75%という圧倒的な普及を果たしている現状を説明。特に近年は急速に伸びており、「この2年半ほどで2.5倍に増え、9億ユーザーに達している」という。インドでは、プリペイド式でユーザーが複数のSIMを持っていることが多いが、正確な普及率はまだ70%に達していないが、「数年後には総人口の12億を上回る」と見ている。

今後の注目マーケットとしては、



「スマートフォン」を挙げ、「近いうちに10億ユーザーを超えるが、10%が利用するだけで1億になるので、そこに期待したい」と語った。

KTのキム氏は、韓国ではiPhoneが投入されて以降、携帯電話端末全体に占めるスマートフォンの割合が急速に増えており、今年末には4分の3に達するとの見通しを示した。

これに伴い、データトラフィックが急増し、現在は「2009年1月比で153倍にもなっている」という。KTでは、WiFiやWiBroでのオフロード対策を実施。さらに最近になってLTEの導入も開始した。LTEに関しては、「LTE WARP」という「セルの境界領域におけるキャパシティを向上させる技術」(キム氏)で急増するトラフィック対策を行っていることを紹介した。

VNPTグループのフック氏は、ベトナムでは現在、6社のキャリアがあり、シェア2位のモビフォンと3位のビナフォンの2社がVNPTグループであることを紹介。1位のビッテルと



(左から)ITU無線通信規則委員会委員の伊藤泰彦氏、NTTドコモ・代表取締役副社長の辻村清行氏、インドTata Teleservices・CSOの大野弘司氏、韓国KT Corporation・バイスプレジデントのキム・ソクジュン氏、VNPTグループ・バイスディレクターのトラン・ビン・フック氏

合わせた「上位3社で95%以上のシェアを獲得している」という。

3Gサービスは09年末に導入。2011年末の段階では普及率は3%に留まっていたが、2012年第1四半期で一気に2倍強の7%になったことを説明。これに伴ってデータトラフィックも急増し、近年は年平均80%ずつ増大していたものが、第1四半期は2倍に伸びている現状を説明した。

NTTドコモの辻村氏は、「スマートフォンとLTEが刺激し合って相乗効果が生み出されている」と語り、今後1年くらいで世界中でLTEの導入が進むという見通しを語った。

また、同社がサービスを開始した「しゃべってコンシェル」「通話電話／メール翻訳コンシェル」などで音声入力による「UI革命」が起こっていると指摘。今後も認識率が上がっていき、「より高級なサービスの登場が見込まれる」と語った。

モバイル決済／送金に注目

その後のパネルディスカッションでは、各国の注目サービスと周波数対策がメインテーマとなった。

サービスでは、モバイル決済や送金サービスが議論の中心となった。

大野氏は、「プリペイドと送金は非常に親和性が高い」とし、今後インドでも送金ビジネスが出てくると見ている。

フック氏は、ベトナムでのモバイル決済ビジネスの可能性はあまりないと見ているが、「日本の鉄道のように、将来的には、電車の改札での利用は期待できるかもしれない」と語った。

キム氏は、韓国では送金サービスよりもモバイル決済への要求が高いことを明かし、「そのためには不正が起らないよう、安全性の確保が重要になる」と指摘した。

辻村氏は、日本ではユーザーの60%がおサイフケータイ機能搭載機を持っており、そのうちの60%が週1回以上利用している現状を説明した。そのうえで、「日本のこのビジネスモデルは、十分に世界に輸出できるだろう」と語った。

周波数対策については、フック氏が「ベトナムでは、今はそれほど問題は無い」と語ったほかは、各国で深刻な問題となっている。

大野氏は、政府高官の不正によって割り当てられた周波数がキャンセルされたインドの現状を説明し、「今は対策の立てようがない」という。

キム氏は、基地局を集中させて対応している韓国での状況を説明した。また、LTEについて世界中で30超の周波数帯が検討されている点を問題視。「グローバルモデルの端末開発でどれだけの周波数に対応させればよいのか分からない。世界でLTEのために共通の周波数を定めるとい議論も必要ではないか」と提案した。

日本でも周波数問題は深刻だが、辻村氏は「非常に楽観的に考えている」という。1979年に自動車電話が始まった時、当時は高い周波数と言われていた800MHz帯を利用した例を挙げ、「800MHz帯は今やプラチナバンドとまで呼ばれている。新しい需要があれば新たな技術が生み出されて解決される。キャリアは今後も技術革新を信じて、サービスを磨いていくことが大切だ」と述べた。

このほか、スマートフォン／タブレットとクラウドの今後についても議論され、辻村氏は「スマートデバイスは、より人の生活に入り込んで来る。そのためにクラウドは絶対に必要であり、両者はきちんと役割分担をしながら、さらに生活に浸透していく」と語った。